
何故か勇者

川岸新兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

何故か勇者

【Zコード】

Z0733Z

【作者名】

川岸新兎

【あらすじ】

十五年前に出現した魔王。目的は侵略でも殺戮でもなく、移住。魔王が移住の対価として人類に差し出したのは魔法という奇跡の技。少年、瀬川宗也は魔王の下で魔法を学ぼうと魔術高校の入試に挑戦するが、とある偶然から手にしたのは聖なる剣。

世界で唯一魔王を殺し得る勇者となつた彼の運命は…?

なんとなくArcadiaのチラ裏にも投稿

勇者、聖剣と出会い

十五年前、突如別世界からやってきた魔王は、絶大な力を持ちながら、人類を滅亡させるわけでもなく、世界を破滅に導くわけでもなく、移住を目的としていた。

対価として彼が持ち込んだのは異界の技術、魔法。人類は空想の中にしか存在しなかつた力を手に入れたのだ。

最もその恩恵を受けた国は、魔王が住む日本。

中でも魔王城の建つ由久市は、現在“魔法都市”と呼ばれて、世界中の注目を集めている。

由久市に存在する国立魔術大学附属高等学校は、現在世界中で唯一魔法技術の専門教育を行う高等学校である。

今日は書類審査を通過した来年度入学希望者に対して筆記試験を行っていた。

「ああ、くそ。駄目だ、絶対ダメだった！」

そう言って頭をかきながら試験会場となつた校舎から出ってきたのは、瀬川宗也という少年だった。

「気にすんなつて。最初から駄目元なんだから」

「そうだよ。瀬川は書類審査に受かつたこと自体奇跡だぜ」

同じ中学に在籍する仲間たちが茶化す。

「喧嘩売つてんのか」「」

「事実だろ。俺だって自分は書類で落とされると思ってたし。去年

はウチの中学、全員書類落ちだつて聞いたよ」

そう言つたのは同じ中学の中で一番学力のある宮野悟。

「富野でも手こなえ無し?」

「マジで運がよかつたらってどいうかな」

四人がそろつてため息をつく。

「これからどうする? 僕は観光でもしてこようかなって思つてゐる
んだけど」

悟の質問に答えたのは一人。

「俺は滑り止めの試験対策。家に帰るよ」

「俺もー」

「宗也は?」

少し悩んで答える宗也。

「富野に付き合つよ。観光に来たこともなかつたし
「わかつた。じゃあここから別行動だな」

そう言つて悟と宗也は一人と別れた。

真つ黒。それが魔王城を見た宗也の感想であつた。

「中まで入れるのか」

「一階部分だけ一般開放されてるみたいだな」

パンフレットを見ながら悟が言つ。

「警備員とかいないのかよ。階段上がつたりする奴いないのか?」
「魔法による完全自動警備システムだそうだ。障壁が展開されてて
階段には近づくこともできないらしい」

熱心にパンフレットを読んでいた悟だつたが、手の中からパンフレットが滑り落ち、ひらひらとどこかへ飛んでいく。
「おつと、スマン。ちょっと拾つてくる」

「ん、早めにな」

パンフレットが入つてしまつた、ドアのない部屋に悟が入るつとするが。

「あれ?」

「どうした？」

「は、入れない？」

パントマイムの様に部屋の入り口部分で止まる悟。

「これが障壁ってやつなの？、かつ！？」

「だったらパンフレットも入り込まないだろ」

そう言つて宗也がパンフレットを取りに行くと、悟を拒んでいた力が嘘のように消え、転んだ悟が悲鳴を上げる。

「何やってんだよ。ほら、パンフレット拾つたし、行くぞ」

「ああ、なんだつたんだ一体……」

悟が謎の現象の正体を確かめようとして、辺りを見回し、硬直する。

「おい、宗也」

「なんだよ」

「俺の視線の先に、何がある？」

言われて悟と同じ方向を見ると、そこには地下に続く階段があつた。

「階段だな」

「ああ、この部屋には階段しかない」

悟の言葉通り、この部屋には階段以外何もなかつた。

悟がゆっくりと階段に近づく。

「おい、階段には近づくこともできなって、さつきお前が……」

言葉は途切れた。悟が階段を、確かに一步、降りたから。

「階段を守る障壁は、この部屋の入口にあつたんだ」

「だったらなんで、パンフレットが入つて

「わからない。でも、お前が入ろうとしたら、障壁は消えた」

「何がまずい」とにならうとしている。そう思つた宗也は悟の手を取つて部屋から出ようとし、失敗した。

「 がつ！？」

見えない障壁に頭をぶつけ、押し戻された宗也。悟も外に向かって手を伸ばしたが、障壁がそれを阻む。

「俺達はここから出られないみたいだな」「どうしきつしきつただよ、この状態」

悟が少し考える。

「……俺は下に降りてみよつと想つ」「こや、それはマジでやばくないですか?」「ここでじつとしてるよりかはいいだろ。下に人がいれば、その人に事情を説明して出してもらえばいい」

そう言つて悟は階段を降り始めた。

「だれかいますよ?」

仕方なく、宗也は悟を追いかけた。

宗也の願いは届かず、一人はやけに広い地下廊で立ってきた。

「誰もいないな」

「おまけに何もない、か」

悟の言葉に首をかしげる宗也。

「いや、あそこになんかある」

「どこの?」

「どこの?、真ん中だよ。部屋の真ん中」

悟は皿を細めて、部屋の中央を見る。

「俺には、何も見えない」

「いや、剣、か? 床に突き刺さつてるじゃないか。鎖がじゅうじやら巻き付いてて」

悟は念を押すように訊く。

「お前には、見えるんだな?」

「……ああ。やっぱなんかあるとしたら俺の方かよ

「みたいだな。お前には何かがある」

「宗也はは、あっと息を吐き、気合を入れた。

「あの剣、抜いてみる」

「いいのか？」

「進入不可能なはずの場所で、俺にしか見えない剣だぜ。俺がやるしかないだろ」「

「……悔しいな。魔王城に隠された武器を見つけたって、絶対なんか選ばれた者っぽいから」

「もしかしたら、魔王の後継者になつたりしてな」

軽く笑つて、宗也は剣の所にやつてきた。

「これで何にもならなかつたら、この剣蹴り折つてやる」

宗也はそう言つて剣の柄に触れる。

瞬間、目が潰れそうなほど光が地下室を満たした。

「うわっ！－ ック！－」

思わず手を放し、腕で顔を覆つたが、それでも暴力的な光が宗也の目を襲つ。

「おい！ 悟、大丈夫か！？」

ああ、という返事は帰つてきたが、何故だかさつきまでの距離よりも遠くから聞こえてきたように思える。

そんなことを思った直後、宗也の腕はがしつと掴まれて、とんでもない力で顔から引きはがされた。

驚きで思わず目を見開いたら、光は收まつていて、目の前にはとびっきり綺麗な少女の顔があつた。

意志の強さを感じさせる金色の瞳。透き通るような、それでいて輝いて見える肌。髪は内側に炎を宿したかのように輝いていて、整つた顔には思わず目を奪われた。

「ふむ、そなたが今代の勇者か。今までの者と違い、凡庸な顔をしているな」

綺麗な紅色の唇が紡いだ言葉は、そんな言葉だった。

「勇者」

宗也の口から滑り落ちた言葉を聞き取り、少女は答えた。

「そうだ。 “光の神”ルグナ・ディオ・アレフトの加護を受けし人の子の末裔よ。そなたは世界を滅ぼそうとする闇を切り払い、神の光を掲げる使命を負つた勇者だ」

「る、ルグ……？」

少女の言葉を理解出来なかつた宗也に、なおも少女は言つ。

「私は光の聖剣『アーヴライト』の精霊、フイリアだ。さあ、勇者よ、我を掲げよ。光の神の名のもとに、悪しき魔の王を討ち滅ぼすのだ！」

少女、フイリアは金色の瞳を輝かせ、宗也に手を差し出した。宗也には何が何だか理解できなかつた。

勇者、入学決定

“魔王”ゼオフィス・レティンヴァール。十五年前にこの世界に移住をしてきた異世界の存在であり、人類に魔法をもたらした世界最高の魔導師。

たつた一人で世界を滅ぼせる男が、瀬川宗也を見ている。宗也の顔面が蒼白になるには十分過ぎる理由だつた。

「ふむ……、聖剣を目覚めさせたのは君で間違いないかね？」

「ツ、ハイ！」

魔王から発せられる威圧感は尋常なものではなく、宗也は反射的にそう答える。正常な思考能力など、かけらも残っていなかつた。

「そうか。……一人とも、下がれ」

魔王はそう言つて、宗也を此處につれてきた男たちをちらりと見た。

「しかし陛下！」

「下がれと命じた。……死にたいか？」

魔王の威圧感は急激に増して、宗也の意識を奪いかけた。そのことに気が付いた魔王はため息をついて顎の鬚を擦る。

「これ以上乱暴に話を進めたくはないのだよ。彼女を怒らせることは無益だと思わないか？」

そう言つて魔王が視線を向けたのは、宗也の隣に立つ少女、聖剣『アーヴライト』の精霊であるフィリア。

「アーヴライト、一つ訊く」

「下らないことだったら殺すぞ、魔王」

殺氣を全く隠さないままに答えるフィリア。宗也は生きた心地がしなかつた。

「そこの二人、お前だけで殺すのに何秒かかる？」

「愚問だ。この程度なら十だらうが一瞬だ」

「……とのことだ。事を荒立てる気がないなら、下がれ」

一人の言葉に戦慄した男たちは、僅かな魔力光を残し、一瞬で消え去った。

「さて、これでゆっくり話ができるな」

魔王は玉座から腰を上げ、ゆっくりと宗也たちのところまで歩いて来る。

「殺し合いで間違いではないのか」

フイリアは光を剣のよう構え、剣呑な空氣を纏わせたまま魔王と宗也の間にいる。

「アーヴライト、この国で殺人は禁じられているのだがね？」

「冗談のつもりか、魔王が」

「いやいや、本気だよ。ここ日本では「くまれな例外を除けば、人を殺すことは禁じられている」

「 まで、二ホン？ どこの事を言っている」

構えた光の先端がわずかに下がる。

「この世界に存在する国家の一つだ。フロンティルグのどこでもないよ」

「フロンティルグではない！？ 何故神の加護無き土地に勇者が現れるのだ！」

あからさまに狼狽するフイリア。魔王は困ったように首をかしげて答える。

「その辺の事情も訊きたいのだが、どうやら君も答えを持つていないうだ」

さて、と言つて魔王は宗也を見る。思わず宗やは氣を付けの姿勢を取つてしまつた。

「そう固くならなくともよい。たしか、そり……、瀬川宗也君だつたか」

「は、はい。え、あ、なんで俺の名前……」

「願書には全て印を通してある。見覚えがあつたので記憶を掘り返しただけだよ」

「勇者よ！ 魔王に氣を使う必要などない！ すぐに契約を交わし、

魔王を「

そこまで言つてフイリアは口を紡ぐ。

「まあ、契約まで済ませているとは元より考えておらんよ」

魔王はそつと人差し指を立てて、闇色の魔力光で魔法陣を空中に描く。

「立つたままで話をするのも疲れるだろ?。部屋を用意した。罷がないか存分に確かめてくれ」

そう言つて魔王は空間転移した。残された魔法陣を見て、フイリアが呻く。

一二、三分そうしてから、フイリアは「罷はないよつだ」と吐き捨てた。

フイリアに連れられて宗也は初めて空間転移を体験した。五感の全てが無茶苦茶に搔き混ぜられたようで、できれば一度と体験したくはなかつた。

魔王は黒の鎧とマントといつ、いかにも魔王らしい恰好から、黒のスーツに着替えていた。二メートル近い隆々とした体躯の割によく似合つている。何をしても傷一つつかない気がするのは、やはり魔王の貴録のせいだろうか。

「さて、二人とも座りたまえ」

そう言って、革張りのソファーに腰かけて、対面に座るように促す。フイリアはふん、と鼻を鳴らして乱暴に腰かけた。宗也も恐る恐る座る。

辺りを眼だけ動かしてみれば、立派な机やらが目に映つた。

「魔術大学にある私の部屋だよ。すぐ使える場所はここしかなかつたのでね」

その言葉で、ようやくここが理事長室であるとわかつた。

「さて、瀬川宗也君。君は事態を理解しているかね?」

「……いえ、まったく」

何がどうなつていてるのかなど、さっぱりわからない。いきなり現れたフイリアという抜群の美少女は宗也を勇者と呼び、宗也の憧れの魔王に対して特大の殺意を向けている。

「無理もない。今から簡単に説明しよう」

詳しく聞きたければ彼女に訊けばいい。そう言って魔王は話し始める。

「フェンデルグ。“無限神”イセオンテユールによつて創造された世界の名前だ。私と、アーヴライトの出身世界でもある」

そこでは“光の神”ルグナ・ディオ・アレフトなどの神々と、“魔王”が熾烈な争いを繰り広げていた。

魔王は神々や彼らに選ばれた人間、勇者によつて幾度となく滅ぼされ、そのたびに新たな魔王が出現。何度も戦いを繰り返した。

「変化があつたのは私が魔王になつてからだ。私は勇者を退け、殺害することに成功した」

ガツ、と音を立て、フイリアが立ち上がる。魔王と視線を交わし、納得いかないように座りなおした。

「話を続けよう。その後、私は神々との戦いに勝利した。彼らを殺戮し、世界を支配した」

「馬鹿な、“光の神”を殺したなど…」

「事実だよ、アーヴライト。……誰にとつても不幸なことに」

「不幸？」

宗也の呟きを魔王は聞き逃さなかつた。

「ああ、そうだ。神々の滅びは、私にとつても不幸な出来事となつた。当時の私は勝利に酔つて、そうは思わなかつたがね」

「どうしたことだ」

「神々が滅んだことによつて、世界は破綻したんだ。私の配下も次々と滅び、私が全力で張つた結界の中に避難した者しか残らなかつた」

魔王は天を仰ぎ、ため息をつく。

「結界は徐々に収縮し、私は最後の力を振り絞つてこの世界に避難した。常世界法則に手を伸ばすのがどれほど愚かなことなのか、私は思い知ったよ」

出来る事ならば、過去に戻つてやり直したい。そう魔王はつぶやいた。

「後悔しているよ。私は大罪を犯したのだ。お前達が私を殺すといふならば、抵抗はしない。家族の事が心残りではあるがね」

目の前の魔王は、小さく、疲れ切つたように見えた。宗也にはさつきまでと違い、ただの人間にしか見えなかつた。

「そうか、ならば今すぐ殺してやろう」

フィリアが立ち上がり、怒りを露わにする。

「契約もしてないのにか？」

「ツ、ちつ！」

苛立たしげにフィリアは腰を下ろす。

「そう、契約だ。聖剣と契約した勇者は、私を殺すだけの力を得る。おそらく、この世界で私を殺せる唯一の手段だ」

魔王は宗也を見る。

「瀬川宗也君、君は私を殺せる力を手に入れることが出来る。使い方を誤れば世界を滅ぼす力だ」

宗也は、何も言えなかつた。

「私はもう、世界が消える光景は見たくないよ。あれほど恐ろしいものはない」

私と同じ体験はさせたくない。そう言つて魔王は、カードを一枚、取り出した。

「……これは？」

「君には、力というものを知つてもらいたい」

カードには宗也の顔写真、学生証の文字。

「四月から、君には国立魔術大学附属高等学校に来てもらひ。力を暴走させても、初めの内なら、私が止めることができるからね」

学生証を受け取り、宗也は礼を言つ。魔王は苦笑して、

「私がしたいようにしただけだ。礼などいらんよ」

魔王は立ち上がり、窓から外を見る。

「私を殺せるということは、言わない方がいいだろ？。君を利用しようとするものが出でてくるかもしれん」

「宗也たちに背を向けた魔王は、話は終わりだと言った。
「君が正しき怒りをもって私を殺すというなら、私はおとなしく殺されるつもりだよ」

その背中を、宗也はじっと見ていた。

「俺は、あの人を殺したくはないよ」

大学から出ようと歩いている途中で、宗也はフイリアに言った。
「奴の行いは到底許されるものではない。だが、……」

フイリアはそこで、何を言つべきか迷い、

「奴が、再び世界に牙を剥くことは、無いよつに思える」
そう言つて、黙つてうつむいてしまった。

勇者、聖剣を手に取る

外に出ると、宮野悟が待っていた。

「ああ、良かった。ものすごい光つたと思ったら、いきなり捕まつて引き離されたから心配したんだぜ」

超有名人と会ったショックで彼の事をすっかり忘れていた宗やは、謝ることにした。

「お、おう。悪い」

「いや、いいよ。それより結局、何がどうなったのか教えてくれよ」
「こつちは何の説明もなかつたんだぜ、という悟に、どう答えたものか考える。

「そつちの美少女一人についても、詳しく説明してくれよ?」

「うーん、……え?」

たしか自分と一緒に歩いていたのは、聖剣の精霊のフィリアだけだつたはずだ。そう考え振り返った宗也の目に映つたのは、確かに二人の少女。

いつの間にか宗也たちと一緒に歩いていた黒髪の少女は、凛と立ち、にっこり笑つた。

「私の名はルシア・レディンヴァール。『魔王』の娘だよ

よろしく。そう言つた少女の眼は、魔王と同じ赤い眼であった。

「うわ、よろしくお願ひします! 僕、宮野悟です」

悟と握手する少女、ルシア・レディンヴァール。

宗也の脳裏にルシアについて知る情報が浮かぶ。

魔王の一人娘。魔王に次ぐ魔力の持ち主。同じ中学三年生。

「うわ、みんなに自慢できるぜ。なあ宗也」

舞い上がつた悟を見て、ルシアが苦笑する。

「そう浮かれる事でもないだろ?。君も魔術高校に入れば、毎日でも会えるだろ?」

「いや、魔術高校に受かる」と自体、奇跡的ですって

そう言言つた後で、何かに引っかかったらしい悟は宗也を見る。

「君、も？」

そこでルシアは、これはまだ秘密なのが、と前置きをする。

「宗也君は特例で魔術高校に入学が決まつたんだよ」

数秒の後、悟の絶叫が大学の敷地に響き渡つた。

「つまり、あれですか。コイツには桁違ひの才能があるから、今のうちに確保しようと」

「まあ、そう思つてくれてかまわないよ」

ルシアの説明で悟は納得したように頷いた。

「別世界の伝説の剣かー。まさしく選ばれし者つて感じだな

あー、羨ましい。とぼやく悟。

「そうかね？ 現代社会では使い道などないと思つただが」

「男の夢みたいなもんですよ。異世界に召喚されて悪しき魔王を倒すみたいのは。あ、ルシアさんのお父さんは素晴らしい方ですよ」

悪しき魔王。その言葉に宗也とフイリアはわずかに反応する。

“魔王”ゼオフィスは、前の世界では『悪しき魔王』だった。恐らく本人はそう思つていると、先ほど見た罪人の様に頃垂れた姿から宗也は考える。

「そう言つてくれるとありがたい。自慢の父だ」

ルシアは何の躊躇いもなくそう言つた。彼女は父親の後悔を知らないのだろうかと、宗也は疑問に思つ。

「なあ宗也、剣見せてくれよ。フイリアちゃんがそつなんだろ？」

「お、おう？」

そう言われても、宗也はあの剣がどこにあるのかよくわかつてい

ない。困つてフイリアの方を見た。

「……『アーヴライト』は、私の実体化の際にエーテルを収束させる核となる」

説明したつもりなのだろうが、余計にわからない。ルシアが説明を引き継ぐ。

「H-テルは、要するに魔力を注ぎ込むと実体化する物質だ。まあ、今はフイリアさんの体の中に剣があるという事だよ」「なるほど。じゃあフイリアが実体化といつのをやめれば剣が出てくるのか」

宗也の言葉に、フイリアが頷く。そして宗也の方に手を伸ばしてきた。何のつもりだらうか。

「手を握れ。私を地面に落とすつもりか？」

「あ、いや。そう言うわけじゃない」

あわててフイリアの手を握る。フイリアの小さな手は柔らかくて温かく、宗也の心臓は鼓動を速めた。

「解くぞ」

フイリアがそう言った直後、彼女の体が白い光になつて消える。

代わりに宗也の手の中に聖剣『アーヴライト』が現れた。

「ほう、綺麗なものだな」

ルシアの感想に、宗也もああ、と肯く。輝く剣は美しく、刀身の中央に入った一本のラインは、フイリアの髪と同じ色をしていた。羽根のように軽い訳でもなく、持ち上げるのが大変なほど重い訳でもない。実用的な、振れば人を殺せる重さ。

「不思議な位俺の手になじむのは、やつぱり俺が選ばれたから、かな」

「歴代の勇者たちも、同じようなことを言つていたな」

刀身からフイリアの声が響く。悟はフイリアの言葉を聞いて、首をかしげる。

「勇者、というと魔王と敵対とかしてた訳?」

「かつてはそうだった。……今は、良く、わからぬ」

フイリアの呟きからは、困惑が伝わってきた。

「あの魔王様と敵対か……。想像できないな」

「私としては仲良くやつてくれるとありがたいのだがな」

悟トルシアの言葉を聞いても、フイリアは何も言わなかった。

勇者、親の説得方法を考える

「ああ、言つたのを忘れるところだつた」
ルシアがそう言つたのは、宗也が由久駅に入り口とするときだつた。

「なんですか？」

「敬語は使わなくてよいよ。四月からは同じ学校の生徒だからね」
もつとも、私はまだ入学が決まっていないが。そう笑つてから、
ルシアは真剣な顔で宗也に向き直る。

「宗也君。君はまだ、魔法を使おうとしてはいけない

「え、いや。そもそも俺はまだ」

「使い方を知らない？ 今から教えるよ」

教えるが、使つてはいけないとは、どうこうことだ？ と宗也は困惑する。

「魔法の使い方はいたつて単純。強く願う。あるいは強く思つ、強く信じる。それが魔法の基本だ」

「そりやまた、ずいぶんと」

「簡単に聞こえるだろ？ だが、普通の人間ではそれだけでは足りない。故に様々な工夫を施すのだが」

君は普通ではない。ルシアはそう言い切る。

「君の潜在能力は、無自覚に聖剣の封印を解くほどだ。おそらく途方もなく高い。聖剣と共に在れば、すぐにその力は目覚めるだろう。目覚めた力が精神に引っ張られたら、容易く爆発する。だから入学までは待つてくれ」

そう言つて、ルシアは一度苦笑する。

「私も色々騒動を起こして、父の手を焼かせたものだ。経験者からの忠告だよ。そもそもこれを言つたために君のところに来たんだ」

「ああ、ありがとう。……で、いいのかな？」

「うん。じゃあ、また会おう」

ルシアは踵を返して、颯爽と去つて行つた。

切符を買おうとした時点で、宗也はある事実に気が付いた。

「そういえば、フィリアはどうしよう」

「私は勇者と共に在るぞ」

「……たぶんそんな感じの事を言つと思つたよ」

恐らく、一つ屋根の下で暮らすことになるだらつ。ビリヤッテ西

親を説得するか悩む宗也に悟がつぶやく。

「美少女と同棲か」

「バツ、馬鹿野郎！ 親もいるんだから、居候ができるだけだ！」

「女に飢えた奴らに知られないよう気をつけろよ」

「……努力する」

「魔術高校は全寮制で、一人一部屋だつたな」

男たちの妬みが恐ろしい事になりそだ、と笑う悟を視界から出して、ルシアの忠告を無視するべきか、さつそく検討に入る宗也であつた。

結果から言えば、何の説明もいらなかつた。

「お母さんうれしいわ。可愛い娘、欲しかつたもの」

「魔術学校なら国立だ。学費が安いから、フィリアちゃんの生活費も貯金で何とかなるぞ」

何とも楽天的だ、詐欺とか大丈夫なのだろうか。悩む宗也を無視して瀬川夫妻はフィリアの世話を焼きはじめる。

日本の生活などしたことがないフィリアの世話は、一人にとつていい刺激になつたらしい。ますます可愛がる。

夕食を作つてゐる最中、チャイムが鳴つた。宗君お願い、といつ

た母に答え、玄関に行つたら段ボール箱を持った配達員がいた。

差出人はゼオフィス・レディンヴァール。中には手紙と、フイリアの魔術高校の学生証と、中学の女子制服とかが入っていた。

「『戸籍等は何とかしたので、彼女を学校生活に慣れさせてくれつて、仕事速すぎだよ魔王-sama』

中途半端な時期だが、フイリアも明日から中学生らしい。宗也は明日、クラスメイトにどう説明するかを悩む事になった。

「此方では家の中に浴場があるとは、便利な世界だな」

フイリアはバスタオルでわしわしと髪を拭きながら宗也の所に来た。

「フーンブルグ、だつけ？ あっちだとどうだつたんだ？」

「フーンデルグだ。向こうは公衆浴場だけだな」

尤も、先代の勇者がいた時代の話だが、とフイリアが言つ。髪が上手く拭けないらしく、タオルを前に持つてきて、軽くにらむ。

「ふーん、……なあ、勇者つて呼ぶのはやめてくれないか？」

宗也がそういうのと同時、フイリアの髪が一瞬、炎を噴き出す。どうやら髪を乾かしたようではあつたが、熱は感じられず、髪も炎を秘めた様な緋色のままだつた。

「なぜだ？」

「勇者つて言われるといろいろ説明がややこしいし、……何より、倒すべき相手が最初から居ないし」

宗也の言葉に、フイリアは少し考え、

「わかった、宗也」

そう、答えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0733z/>

何故か勇者

2011年12月5日09時55分発行